

寺だより

ごくらく通信

令和5年8月1日
第24号

発行所
千葉県安房郡鋸南町
竜島7番地
極楽寺
0470-55-0733
<http://gokurakuji.online>

心を三摩地に住する
——意密いみつのおはなし——

前々回から真言宗の「三密加持」の教えについて連載しています。これまで、身密と口密についてお話しましたが、今回は意密について。心をどのように仏さまの心境として整えるかについてのお話です。

「三密」とは、仏さまの身体の行為（身密）、仏さまの言葉（口密）、仏さまの心のありよう（意密）のことであり、私たちの身体・言葉・心の持ち方を、仏さまの三密に合わせていく、つまり、私たちの普段の行為を、仏さまの行為としていくことを三密加持といえます。

「加持」とは、仏さまの大いなる力が、私たちに与えら

れることをいいます。私たちが仏さまを理想的な人格者として理解し、その理想を目指して行為することで、私たちは仏さまに加持され、その不思議な力を与えてくださるのです。その時に、真言宗の大切な教えである「即身成仏」が開顕します。

「成仏」とは、人生の悩みや苦しみを離れ、心安らかな境地に至ること。死後に安らかな境地に逝くこともまた成仏といいますが、真言宗では、私たちが生きている、この人生の中で、この身そのまま仏になるということを説かれました。



私たちは大日如来と本来一体です

真言宗の根本本尊である大日如来さまは、宇宙全体の働きを仏さまとして表現したものです。私たちの生命も宇宙の一部と理解できれば、宇宙（大日如来）と、私たちの生

命は、最初から一体であり、私たちと仏さまは、最初から繋がっているといえます。

そのことを理解するとともに、この身このまま仏になるというのは、身体と言葉と心の三密加持をとおして、次第に私たちも仏さまとして行為できるようになるからなのです。

お大師さまは、意密加持については、「心を三摩地（さんまじ）に住する」と説かれました。「三摩地」とは、インドの言葉「サマーデー」を音写したもので「三昧（さんまい）」とも音写されます。

サマーデー（三昧）とは、読書三昧、放蕩三昧などの言葉もありますが、無我夢中になっている状態です。少し難しい言い方をすると、「主観と客観が一体になっている状態です。

例えば花を見るという行為は、花を見ている私と、見られている花があります。でも三摩地の心境に入れば、見

るものと見られているものの区別はなくなりません。

花を見ることに夢中になると、いつの間にか、自分を忘れ、頭の中が見ている花でいっぱいになります。

花だけに意識が集中して、そこには、もう自分がいるという認識はありません。その瞬間を切りとってみると、見ている花が、どんな形で、何という名前の花かと認識することも忘れている瞬間があります。

その瞬間には自分が花、花が自分となっている。見ているものと見られているものが一体になっているのです。意密加持とは、仏さまをイメージする三摩地です。仏さまに一心に祈ることをとおして、心は仏さまの三摩地に住するのである。

お大師さまが説かれた三密加持の実践は、「手に印契をなし、口に真言を誦し、心を三摩地に住する」というものでした。その実践を続けることが

即身成仏（心やすらかな人生）に至る方法なのです。

日々の生活の中でも、お仏壇の前に立つと、私たちは自然に手を合わせます（身密）。そして、お経や真言をお唱えします（口密）。ご真言やご宝号をお唱えしている時は、仏さまやご先祖さまに心が向いています（意密）。

その瞬間（三密加持）は、余計なこととは考えず、自分は仏となり、仏さまは私となり、一体となっています。

私たちはそうした毎日の実践の中で、自らの内側にある仏さまと出会うことができるのです。

弘法大師ご生誕

千二百五十年記念法要

去る3月25日に弘法大師ご生誕

1250年記念法要を開催しました。

極楽寺では、今年の記念年に向けて、足掛け7年にわたり境内整備事業を進

めてまいりました。

無縁墓地の整理、参道の新設、山容の整備です。そのモニュメントとして、鐘楼堂の建設も行われました。



新設された参道。境内の風景も一新しました

この記念事業にあたり、総事業費はおよそ4千万円となりましたが、延べ295人の方からの1728万7千円のご寄付を賜り、おかげさまで滞りなく事業が満了することができました。重ねて御礼もうしあげます。



雨でしたが稚児たちは行列を楽しんでくれました

弘法大師ご誕生1250年記念慶讃法要の当日は大雨となりました。行事の遂行は難渋しましたが、お釈迦さまが生まれたその日は、甘露の雨が降ったという伝説があります。雨は慶事にふさわしい天気です。当日は子どもたちによる稚児行列も行われました。



新設された鐘楼

雨のため、稚児行列は本堂内で開催されましたが、子どもたちは煌びやかな衣装をまとい、ご家族の方と他にはない記念の写真を撮ることができ、行列を楽しんでくれました。



本堂前に弘法大師ご生誕1250年記念の回向塔婆を建立しました。年内建立の予定です

足掛け7年にわたる事業も、振り返ればあっという間でした。先の見えな未来も、確固たる目標を持って、前を向いてさえいれば、協力してくださる方と出会い、少しずつ良い方向に向

かい、良い結果に結実することを実感した次第です。

法要では、有縁の僧侶が集まり、法要の参列者とともに、お大師さまのご宝号、「南無大師遍照金剛」を心を込めてお唱えしました。

お大師さまの教えを胸に、檀信徒の皆様さまとご先祖さまが安らげる菩提寺となるように願っています。

伊藤新 得度しました

僧侶となるための最初の儀式に「得度式」があります。

得度の「度」とは「わたる」こと。迷いの世界から、悟りの世界へと渡る意味があります。つまり一般生活から、仏門修行に入るための入門の儀式です。智山派では、6歳から入門資格があります。

7歳になった法資の伊藤新(あらた)が、このたび総本山智積院で開催された得度式に参加しました。



得度式では、儀式の中で左右のもみあげの髪を剃り落とします。僧侶としての戒めを授かり、得度が証明されます。

得度式には、小学生から大人まで全国から二十数名の新発意(しんぱっち)出家を志す人のこと(ご)が集まりました。

得度式に際して剃髪し、総本山智積

院道場にて智山派管長布施浄慧猊下からお坊さんとしての誓いを授かります。一連の儀式を終え、得度したことが証明されると、僧名という、お坊さんとしての名前を授かります。新は「尚新(しょうしん)」という僧名を授かりました。

子供の成長は早いものです。もう数年すれば、法要の手伝いもできるようになっていくと思います。一人前の僧侶になれるよう、精進してまいります。

今年の施餓鬼法要

今年の極楽寺施餓鬼法要はコロナ以前の形式に戻し、8月27日10時から開催されます。先祖代々供養の施餓鬼塔婆のお申し込みも受け付けております。今年の夏は格別な暑さです。どうか暑さ対策にご留意の上、ご参列ください。